



南の予報センター

鹿児島県は日本一貧乏な県である
 そうである、その鹿児島に日本一大
 きな測候所が建てられたのが昭和8
 年。一昨年地方気象台に出世したの
 であるが、20年前定員10名そこそ
 この時分に建てられた画四階建の庁
 舎は、一坪の増築もなすことなくし
 て、定員八十余人の南九州予報セン
 ターとして発足するにさしたる不自
 由もなかった。

貧困な県の財布でよくぞこれだけ
 のものをつくらせた、所長円岡平太
 郎氏の明と努力とはまったく感嘆に

堪えないものがあるが、義理がたい台風が年々才才忘れることなく訪づれるので、南に防災のとりでをかためる大勢にうながされたことも否めないであろう。

ともあれ 鹿児島市のどまん中にてんとおさまった鹿児島地方気象台は、台風のさきもりとして自他ともに許す存在である、それだけに台風期における苦悩も深い。気象学の現段階に於て、世間一般の気象台に寄せる期待と要求は重過ぎる。台風が台湾附近までのし出すと、三つの局線電話は応接にいとまなく、こちらからの上陸地通話は容易にできない。災害に打のめされがちの鹿児島人が台風期に神経過激になるのは無理もないが、台風の点、日時、風力風向、降雨量、時雨量まで詳しく問いつめようとする知識人もある。

屋上から指呼の間に見える櫻島は観光鹿児島のシンボルであるが、麗容熱火をつむ活火山であるから気象台にとっては油断できない、一朝暴発せんか16000の島民の生命財産が危機に頻するは勿論、対岸鹿児島市の安寧も保てなくなるから、常時噴煙観測に気を配る一方櫻島の熔岩地帯に450倍率の微動地震計を設備して、火山のおもりも眞剣である。(文・園田鉄雄、写真・日高正美、沢田岩雄：鹿児島地方気象台)